

涙をこえて

2003年1月25日、初めて授かった息子が天国に旅立った。私は妊娠25週目から切迫早産で入院をしており、生活に制限はあったが「元気な赤ちゃんを産むため！」と自分に言い聞かせて頑張った。生まれてきた息子は総肺静脈還流異常症という病気で、元気に生まれてくるものと信じていた私は、病気をなかなか受け入れる事が出来なかった。息子は手術の受けられる病院へ転院となり、私も後を追って転院した。実家から遠く離れた病院で、身内は病院に来ることが難しく、NICUの面会時間に私は一人寂しく、でも息子に会いたい一心で、息子に会いに行った。看護師は「産後の身体なんだから、無理はしないでね」と私を気遣い、息子の様子を色々と教えてくれた。面会に行くたび、息子の周りには看護師が折った折鶴が増えていった。息子に何もできない私にも看護師は折紙を渡してくれ、折った折鶴は私が息子のためにできた初めての事だった。ただただ不安で悲しくて、病室で私は一人、泣いてばかりいた。時々、病室の開いた扉がそっと閉まるのを感じ、看護師の無言の気遣いに更に涙がこぼれた。

数日後、息子は息を引き取った。すすり泣く私に夫が「笑顔で送ろう」と言った。看護師は「あちらで身体を拭いてあげてください」と個室を用意してくれた。私は個室でまだ柔らかい息子の身体をガーゼでそっと、こみ上げる涙と一緒に拭いた。夫は「よく頑張ったね」と息子を撫でて泣いていた。夫は周りの親たちに配慮し、自分が泣かないことで私の涙を止めようとしたのだった。看護師はその想いを察し、すぐに夫と私に個室を用意してくれた。お陰様で、夫と私は感情をとめることなく息子とお別れができた。

看護師が接するのは患者だけではなく、その家族の気持ちをどう受け止め、どう接するかも看護の一つであると、私は息子が亡くなる経験を通して思った。

数日後、病棟より自宅へ、亡くなった方たちとお別れを行うという葉書が届いた。出席すると、あの時の看護師がいた。目に涙をいっぱい浮かべていた。あの時、泣けなかったのは夫だけではなく、看護師もだったのではないか。その涙を見て、私たちと同じように息子を想ってくれる気持ちにほっとした。

息子の誕生と死から10年が経ち、偶然にも息子と同じ誕生日に娘が生まれた。そして、そのことが、あの時の私の気持ちや看護師の優しさを思い出させてくれた。時には離れた場所から、そしてここぞという時にはそっと手を差し伸べられる場所で、心に寄り添ってくれた看護師が今も私の心の奥底にいる。あの時の私の気持ちを一つ一つ受け止めてくれた、あの看護師のように、私はなりたいたいと日々思い、涙をこえて看護学生として今、ここにいる。